

第30回夏期福音特別集会(4)(伊東)

神の国

――イザヤ書第24章～27章――

1983年7月24日

小池辰雄

世界審判史 おそるべき神 不滅なる者 栄光在主 とこしえまで死を吞みたまわん キリスト無者 出我 なんじの熱心 キリストの大責任 無我執の世界 天界で一緒に進んで行こう キリストと魂が一つのからだとなる

【イザヤ24】

1 視よエホバこの地をむなしからしめ、荒廃^{あれすた}れしめ、これを覆^{くつが}えてその民をちらしたもう。2 かくて民も祭司もひとしく、僕も主もひとしく、下婢^{はしため}も主婦^{いえとし}もひとしく、買うものも売るものもひとしく、貸すものも借るものもひとしく、利をはたるものも利をいだす者もひとしく、この事にあうべし。3 地はことごとく空しく、ことごとく掠^{かす}められん。こはエホバの言いたまえるなり。4 地はうれえおとろえ、世は萎^なえおとろえ、地のとうときものも萎えはてたり。5 民おきてにそむき法^{のり}をおかし、とこしえの契約をやぶりたるがゆえに、地はその下にけがされたり。6 このゆえに呪詛^{のろい}は地をのみつくし、そこに住めるものは罪をうけ、また地の民はやかれて僅^{わず}かばかり遣れり。7 あたらしき酒はうれえ、葡萄はなえ、心たのしめるものはみな嘆息せざるはなし。……11 街頭^{ちまた}には酒の故によりて叫ぶこえあり。すべての歓喜^{よろこび}はなくなり、地のたのしみは去りゆけり。12 邑^みはあれすたれたる所のみのこり、その門もこぼたれて破れぬ。13 地のうちにててもろもろの民のなかにて遺るものは橄欖^{かんらん}の樹のうたれしのちの果の如く、葡萄の収穫^{かりいれ}はてしのちの実のごとし。

14 これらのものを声をあげてよばわん。エホバの稜威^{みいつ}のゆえをもて海より飲びよばわん。15 この故になんじら東にてエホバをあがめ、海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名^{みな}をあがむべし。16 われら地の極より歌をきけり。いわく、栄光はただしきものに帰すと。われ云らく、我やせおとろえたり我やせおとろえたり。我はわざわいなるかな。欺騙^{あざむくもの}者はあざむき欺騙^{あざむくもの}者はいつわりをもて欺むけり。17 地にすむものよ恐怖^{おそれ}と陷穴^{おとしあな}と罟^{わな}とはなんじに臨めり。18 おそのれをのがるる者はおとしあなに陥^{おちい}り、おとしあなの中よりいづる



ものは罣^{わな}にかかるべし。そは高^{たか}処^{きところ}の窓^{まど}ひらけ地の基^{もと}ふるいうごけばなり。
19地は砕^{くだ}けにくだけ地はやぶれにやぶれ地は揺^ゆれにゆれ、²⁰地はよえる者のごとく
踰^よぎによろめき、²¹飯^{かり}廬^やのごとくふりうごく。その罪はそのうえにおもく遂^{つい}
にたおれて再びおくることなし。

21その日エホバはたかき処にて高きところの軍^{つわもの}兵^{へい}を征^{きた}め、地にて地のもろ
もろの王^きを征^{きた}めたまわん。²²かれらは囚^{めしうど}人が穴^{あな}にあつめらるるごとく集^あめら
れて獄^{ひとやのうち}中^{ちゆう}にとぎされ、多くの日^ひをへてのち刑^{つみ}せらるべし。²³かくて万軍のエ
ホバ、シオンの山およびエルサレムにて統^{すべ}治^{おさ}め、かつその長老たちのまえに
栄^{えい}光^{くわう}あるべければ、月^おは面^{おも}あからみ日ははじて色^{いろ}かわるべし。

【イザヤ25】

1エホバよ汝^なはわが神^{かみ}なり。我^{あが}なんじを崇^{あが}めなんじの名^{みな}をほめたたえん。
汝^なさきに妙^{たえ}なる事^{わざ}をおこない、古^{いにしへ}時^{とき}より定^{さだ}めたることを真^{まこと}実^{じつ}をもて成^なしたま
いたればなり。……4そはなんじ弱^よきもの保^{とり}砦^でとなり、乏^{なやみ}しきもの難^{がた}の
ときの保^{とり}砦^でとなり、雨^{あめ}風^{ふう}のふききたりて垣^{かき}をうつごとく暴^{あら}ぶるもの荒^あれき
たる⁵ときの避^{さけ}所^{ところ}となり、熱^{あつ}をさくる蔭^{かげ}となりたまえり。⁶なんじ外^{あだし}人^{びと}の喧^{さわ}嘩^ぎ
をおさえて早^{はや}ける地^ちより熱^{あつ}をとりのぞく如^{ごと}くならしめ、暴^{あら}ぶるもの凱^{かち}歌^{うた}を
とどめて雪^{ゆき}の陰^{かげ}をもて熱^{あつ}をとどむる如^{ごと}くならしめたまわん。

6万軍のエホバこの山にてもろもろの民^{たみ}のために肥^{こえ}たるものをもて宴^{うたげ}をも
うけ、久^{ひさ}しくたくわえたる葡^ぶ萄^{たう}酒^{しゆ}をもて宴^{うたげ}をもうく。随^{ずい}おおき肥^{こえ}たるもの久^{ひさ}
しくたくわえたる清^{すめ}るぶどう酒^{しゆ}の宴^{うたげ}なり。⁷又^{また}この山にてもろもろの民^{たみ}の
ぶれる面^{かお}おいとともろもろの国^{くに}のおおえる外^{おおい}ぎぬをとりのぞき、⁸とこしえ
まで死^しを吞^はみたまわん。主^{かみ}エホバはすべての面^{かお}より涙^{なみだ}をぬぐい、全^{けん}地^ちのうえ
よりその民^{たみ}の凌^は辱^{しやく}をのぞき給^{たま}わん。これはエホバの語^{こと}りたまえるなり。

9その日此^{かく}如^{ごと}いわん。これはわれらの神^{かみ}なり。われら俟^{まち}ち望^{のぞ}めり。彼^{かれ}われ
らを救^{すく}いたまわん。是^{こゝろ}エホバなり。われらまちのぞめり。我^{われ}儕^しそのすくいを
歡^{よろこ}びたのしむべしと。……

【イザヤ26】

1その日ユダの国^{くに}にてこの歌^{うた}をうたわん。われらに堅^{かた}固^こなる邑^{まち}あり。神^{かみ}す
くいをもてその垣^{かき}その藩^{はん}となしたもうべし。²なんじら門^{かど}をひらきて忠^{ちゅう}信^{しん}を
守^{まも}るただしき国民^{くんにん}をいれよ。³なんじは平^{やす}康^{きやう}にやすきをもて心^{こゝろ}志^しかたき者を
まもりたもう。彼^{かれ}はなんじに依^よ頼^{たの}めばなり。⁴なんじら常^{とこ}盤^{ばん}にエホバにより
たのめ。主^{かみ}エホバはとこしえの巖^{いわ}なり。……

8エホバよ審^さ判^{はん}をおこないたもう道^{みち}にてわれら汝^なをまちのぞめり。われら
の心^{こゝろ}はなんじの名^なとなんじの記^し念^{ねん}の名^なをししたうなり。⁹わがこころ夜^よなん



じを慕いたり。わがうちなる霊あしたに汝をもとめん。そは汝のさばき地におこなわるるとき世にすめるもの正義をまなぶべし。10 悪者はめぐまれるれども公義をまなばず、直き地にありてなお不義をおこないエホバの稜威を見ることをこのまず。

11 エホバよなんじの手たく拳がれどもかれら顧みず。然どなんじが民をすくいたもう熱心を見ればじをいだかん。火なんじの敵をやきつくすべし。12 エホバよ汝はわれらのために平和をもうけたまわん。我儕のおこないしことは皆なんじの成したまえるなり。13 エホバわれらの神よなんじにあらぬ他の主ども曩にわれらを治めたり。然どわれらはただ汝によりて汝の名をかたりつげん。14 かれら死にたればまたいきず、亡霊となりたればまた復らず。なんじかれらを糺してこれを滅ぼし、その記念の名をさえ悉くうせしめたまえり。……17 エホバよわれらは孕める婦のうむとき近づきてくるしみ、その痛みによりて叫ぶがごとく汝のまえに然ありき。18 われらは孕みまた苦しみたれど、その産めるところは風ににたり。われら救いを地にほどこさず、世にすむ者うまれいでざりき。19 なんじの死者はいき、わが民の屍はおきん。塵にふすものよ醒てうたうたうべし。なんじの露は草木をうるおす露のごとく地はなきたまをいださん。

20 わが民よゆけ。なんじの室にいり、汝のうしろの戸をとじて忿怒のすぎゆくまで暫時かくるべし。21 視よエホバはその処をいでて地にすむものの不義をただしたまわん。地はその上なる血をあらわにして、殺されたるものをまた掩わざるべし。

【イザヤ27】

1 その日エホバは硬く大いなるつよき剣をもて、疾走るへびレビヤタン、曲りうねる蛇レビヤタンを罰しまた海にある鰐をころし給うべし。

2 その日如此うたわん。うるわしき葡萄園あり之をうたえよ。3 われエホバこれを護り、おりおり水そそぎ夜も昼もまもりて害うものあらざらしめん。4 我にいきどおりなし。願わくは荊棘のわれと戦わんことを。然ばわれすすみ迎えて皆もろともに焚き尽くさん。5 寧ろわが力にたよりて我とやわらぎを結べ。われと平和をむすぶべし。6 後にいたらばヤコブは根をはり、イスラエルは芽をいだして花さき、その実せかいの面にみちん。……

●世界審判史

今日はイザヤ書24章から27章です。ドイツの詩人、ゲーテと並び称せられるシラーの詩の中に、



「世界歴史は世界審判史である」

という言葉がある。預言書はまさにそのことを語っている書であります。今日、これから学ぶところもまさに「世界審判」のことが展開している。しかも、第一、第二、第三イザヤをとおして、ある意味において最も輝かしい言葉がここに表れている非常に不思議なところですよ。

まあ、イザヤ書一卷をポケットに入れて、若い人はこれを繰り返し読んで――これは全聖書の縮図ですから――このイザヤ書に狂える者なりというような人が出てきてもいいと思っています。生涯をイザヤ書の研究に没頭してもいいくらいなところですよ。雄大さにおいては、パウロの書簡もこのイザヤ書にはかなわない。もちろん、パウロも、エペソ、ピリピ、コロサイということになると、凄いとこにいつてますけれども。パウロもイザヤ書を愛読したと思います。まあとにかく、驚くべきものですね。

日本のクリスチャンは預言書をもつと読まなくてはダメです。でなければ、線の太い人間ができない。特に青年諸君はよく読まなくては。やはり、内村先生は最後にイザヤ書の講義をしたかったです。それで、日比谷で少し始められたが、お身体の関係で中絶してしまった。非常に惜しいことでした。内村先生の魂はまさにこのイザヤの霊統をひいているような魂ですよ。20世紀のこれからの約20年――もう20年はないですけども――預言者の言葉が本当に天界から響いてくるように思います。

●おそるべき神

では、イザヤ書第24章にはいります。

「視よエホバこの地をむなしからしめ、あれすた荒廃れしめ、これを覆えくつがしてその民をちらしたもう。

これは当時の全世界に対するところのイザヤの言葉です。全くこのような響きを、今、全世界にラジオで、世界ラジオで預言書を読んだらいいと思う。世界ラジオなんてものがあるかどうか知らんけれども。

²かくて民も祭司もひとしく、僕も主もひとしく、はしため いえとし下婢も主婦もひとしく、と。パウロも、「自主も奴隷も、男も女もない」と言ってますが、ああいう言葉と同じように、イザヤはこのときにいわゆる相対的な差別を全部、撤廃してます。

買うものも売るものもひとしく、貸すものも借るものもひとしく、利をはた
るものも利をいだす者もひとしくこの事にあうべし。

「この事」というのは審判です。世界審判にあうぞと。まあ驚くべき言葉ですね。実に預言者の畏れている神さまは、おそるべき神ですよ。おそるべき神ということは、その前に平伏さなければならぬ神ということですよ。

今は、平伏しを知らない。日本人は魂の本当の平伏しを知らない。もうそれで一切の問



題が起きている。東京の真ん中で大地に平伏して――預言者イザヤではないけれども――動かないでいる。そんな姿を表してもいいと思うくらいです。

非常に傲慢になっている。とんでもない民主主義です。もう私は民主主義という言葉は嫌いです。神が主である。神主である。民主ではない。そんな間違った民主主義でおどっているような日本人は、私は正直――藤井先生ではないが――滅びたらいいいと思うくらいですね。

内村、藤井は1930年に――これは日本の大事な預言者でした――これが同じ年に仆れた。私は、あの頃の藤井先生の姿がありありと浮かんできます。まああんな人はいなかった。ダンテが歩いていったときに、「地獄から出てきた人がいる」と乙女らが言ったということが書いてありますが、藤井先生のあの時の姿はまさにダンテのように地獄から出てきたような顔をしていました。蒼白でした。内村先生の仆れたときに、

「この内村鑑三の屍体しかばねを乗り越えて、我々は進んで行かなくてはいいかん。真理のためにはいよいよ前進して行け」

と叫んだ。藤井先生は「真理」という言葉が非常に好きでしたが。

このイザヤ書はそのような、神を畏れ、平伏していく。まあこのような魂を出すユダヤ人というのはとにかく驚くべき民族です。アモスから預言者の一系列というものを、藤井先生は日本の山々に、雲に聳えて煌々と白く輝いている峰に例えておられた。

●不滅なる者

3 地はことごとく空しく、ことごとく掠められん。こはエホバの言いたまえるなり。

「空の空なるかな、すべて空なり」

という伝道の書、コーヘレスの言葉がありますが。神を畏れずしては、すべては空である。いわゆる人間の文化文明が何ものぞということになる。

4 地はうれえおとろえ、世は萎えおとろえ、地のとうときものも萎えはてたり。

たたみかけて言っている。

5 民おきてにそむき法をおかし、とこしえの契約をやぶりたるがゆえに、地はその下にけがされたり。

大地もけがされてしまったと。特に法学を勉強する人たちは預言書をよく読みなさい。申命記から。

6 このゆえに呪詛のろいは地をのみつくし、そこに住めるものは罪をうけ、また地の民はやかれて僅かばかり遺れり。7 あたらしき酒はうれえ、葡萄はなえ、心たのしめるものはみな嘆息せざるはなし。

人間界がおかしくなると、自然界もおかしくなるし、大地までもおかしくなってしまう。



11 街頭^{ちまた}には酒の故によりて叫ぶこえあり。すべての歓喜^{よろこび}はくらくなり、地のたのしみは去りゆけり。12 邑はあれすたれたる所のみのこり、その門もこぼたれて破れぬ。13 地のうちにもろもろの民のなかにて遺るものは橄欖^{かんらん}の樹のうたれしのちの果の如く、葡萄^{かりいれ}の収穫^{かりいれ}はてしのちの実のごとし。

ということはその遺つたものは非常に少ない。けれども、遺れる者――預言書の中にこの「遺れる者」

という言葉がよく出てくる。特にイザヤ書に出てくるわけですが――私たちはその意味で、神の国に遺れる者、神の国のために遺れる者です。

肉体はどんなにすつ飛んでいっても、遺れる者です。ということは、「不滅なる者」ということです。滅びない。キリストを生きる人は滅びない。必ず遺る。神の国に遺るんですよ。殉教の死をとげても、本当に遺っているんですから。そういう遺れる者。

「滅びない者」

ということですが、別な言葉でいえば。どんな嵐が来ても、どんな天変地異があつても、どんな戦乱があつても、この人たちは滅びない。神の国を継ぐものである。今日は「神の国」という題ですけども。神の国に遺されている者、神の国のために遺されている者ということです。

14 これらのもの

この遺りの民は、

声をあげてよばわん。エホバの稜威^{みいつ}のゆえをもて海より歓びよばわん。

非常に預言者の言葉は闇と光が強い。レンブラントの絵みたいだね。必ず光が射している。レンブラントの絵も、かなり暗いところがあつても、それとコントラストをなして、分量は少ないけれども、その少ない光が闇を必ずやつつける姿であるし、また闇を光に変えてしまふ、そのような光。このような13節からあとの言葉は非常に楽しいですね。

● 栄光在 主

15 この故になんじら東にてエホバをあがめ、海のしまじまにて地中海のことです。

イスラエルの神エホバの名^{みな}をあがむべし。

その次の16節はよく覚えてください。

16 われら地の極^{はて}より歌をきけり。いわく、栄光はただしきものに帰すと。

私は大好きな句の一つです。地の極から歌が響いてきた。それは、

「栄光はただしきものに帰す。義とせられたる者に帰す」

と。イスラエルからいうと、この選民が「ただしきもの」。霊的な選民。私たちはキリストの御霊をいただいたから、御霊をいただいた者はキリストの義を賜りたる者。これが「た



だしきもの」です。福音的な角度であります。

栄光は義人に帰するという。ただしき者のうちの、もちろんただしき者はキリストだけです。

「栄光在主」

という。栄光は主に帰する。私たちの証言、感話はみんな栄光在主の証言ですから。栄光は主に帰する。そして、私たちはその主の栄光を賜り、主の栄光と成るわけです。それから、地の極から歌が響いてきた。栄光はただしき者に帰すと。

どんなに惨めな取り扱いを受けようと、誰も泣いてくれない。誰も涙を知らない。誰もその血を知らない。そのような者に対して神さまの栄光が輝く。もうこういうことになる、黙示録的なところに来てます。今日読むところには、非常に黙示録と近いところが方々にあります。黙示録がむしろイザヤ書に込えているわけです。

われ云らく、我やせおとろえたり我やせおとろえたり。我はわざわいなるかな。
欺騙者はあざむき欺騙者はいつわりをもて欺むけり。

たたみかけて言うね、二度か三度。あとの方にも出てきますけれども。これは嘆きの言葉です。

17地にすむものよ恐怖と陷穴と罟とはなんじに臨めり。18おその声をのが
るる者はおとしあなに陥り、おとしあなの中よりいづるものは罟にかかるべし。

エレミヤ記48章にも同じような言葉がある。

そは高处の窓ひらけ地の基ふるいうごけばなり。19地は碎けにくだけ地は
やぶれにやぶれ地は揺にゆれ、20地はよえる者のごとく蹠きによるめき、
飯廬のごとくふりうごく。その罪はそのうえに

「そのうえに」というのはこの大地の上にです。

おもく遂にたおれて再びおくることなし。

これはまさに霊震地震が起きているわけです、神の審判の霊震が。霊なる震えです。

21その日エホバはたかき処にて高きところの軍兵を征め、

「征め」というのは、罰するということです。これはそういつた悪の勢力、悪の軍です。

地にて地のもろもろの王を征めたまわん。22かれらは囚人が穴にあつめらる
るごとく集められて獄中にとざされ、多くの目をへてのち刑せらるべし。
23かくて万軍のエホバ、シオンの山およびエルサレムにて統治め、かつその
長老たちのまえに栄光あるべければ、月は面あからみ日ははじて色かわるべ
し。

と。神の審判がそのように、自然現象にまで表れてくる。そういう、審判の方の凄いますが歌われている。



●とこしえまで死を吞みたまわん
25 章にくると、今度は讚美になります。

「エホバよ汝はわが神なり。我なんじを崇めなんじの名をほめたたえん。
汝さきに妙なる事をおこない、古時より定めたることを真実をもて成したま
いたればなり。」

この「真実をもて」というのは、「アーメン」という字を二つの形でもつてたたまかけて言
っているんです。我々が心の底から言うときに、「本当に」と言うね。「本当にやった」とか、
「本当に、本当に」というね。まあ軽く言っているあれと違うけれども。

「誠に誠に、汝らに告ぐ」

とキリストが言われた。あれ式なんです、こここのところの言い方は。4 節、

4 そはなんじ弱きものの保砦となり、乏しきものの難のときの保砦となり、
雨風のふききたりて垣をうつごとく暴ぶるものの荒きたるときの避所とな
り、熱をさくる蔭となりましたまえり。

4 節は非常に深い慰めの言葉ですね。そのようにして守ってくださいました。その外敵に対す
るところの、悪の勢力に対するところの、神の守りに対して讚美しているわけです。

5 なんじ外人の喧嘩をおさえて早ける地より熱をとりのぞく如くならしめ、
暴ぶるものの凱歌をとどめて雪の陰をもて熱をとどむる如くならしめたまわ
ん。

こここのところの「たまわん」は、あるいは「たまえり」と言ってもいい。6 節、今度はも
う少しまた強くなってきます。

6 万軍エホバこの山にて

「この山」は「シオン」のこと。

もろもろの民のために肥たるものをもて宴をもうけ、久しくたくわえたる葡
萄酒をもて宴をもうく。臚おき肥たるもの久しくたくわえたる清るぶどう
酒の宴なり。

特別な饗宴ですね、敵前の饗宴。これも神の国の饗宴として非常に豊かな表現になってい
ます。

7 又この山にてもろもろの民のかぶれる面おおいと

「かぶれる面おおい」というのは、苦しみや悲しみにあつたときの表現です。

もろもろの国のおおえる外ぎぬ

これも同じことです。

をとりのぞき、とこしえまで死を吞みたまわん。

この第一イザヤの今日読むところには、死に打ち勝つこと、復活のことが出ている。旧約
で特別に明るいところが出ている。死を吞んでしまう。



「どこしえまで死を吞みたまわん」

という。まさにコリント前書15章がこれに応ずるところの復活の音信です。そして黙示録21章。

主エホバはすべての面より涙をぬぐい、全地のうえよりその民の凌辱をのぞき給わん。これはエホバの語りたまえるなり。

黙示録7章を開きます。13節から、

「¹³長老たちの一人われに向かいて言う『この白き衣を著たるは如何なる者にして何処より来りしか』¹⁴我いう『わが主よ、なんじ知れり』

おもしろいね、「どこから来たか」と問うのに、「わが主よ、なんじ知り給う」と答える。この「知る」が前回申し上げた「知る」なんです。

かれ言う『かれらは大いなる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。』

これはまさに十字架の贖罪です。

¹⁵この故に神の御座の前にありて昼も夜もその聖所にて神に事う。

地上で、とにかく、神の国のために艱難を経てこない者は天国に入ることができない。なんらかの意味において、十字架を負わない者は天国に入ることができない。

「汝ら、己が十字架を負いて我に従え」

と言う。十字架をおわされて、逆に力が来る。これが聖霊のありがたきなんです。やせ我慢して耐えているのではない。まあとにかく、それは逆比例してくる。何でも来てみる、七難八苦が来てみると。パウロがそれを実証して行きました。使徒たちはみなそれを実証して行きました。この召団の人たちは烈々たる魂にならないと。絶対にへこたれない。

人間というのはいろんな型がありますよ。その人その人の型はそれぞれでいい。ただ、そこに本当にキリストの義と愛がその人らしく表れているか。それが大事なことです。そして、それはみな聖霊が宿るときに、それが一番その人らしく出てくる。

御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。¹⁶彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。¹⁷御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり」(黙示録7・13～17)

と。これは、私は聖書の中で一番好きなのところの一つです。藤井先生が仆れた時に、私は先生の告別式にここを読みました。これがイザヤ書に相応じている。

「主エホバはすべての面より涙をぬぐい、全地のうえよりその民の凌辱をのぞき給わん。これはエホバの語りたまえるなり。」(イザヤ25・8)

と。集会の最後に歌う「羔の血を」という私の讃美歌がまたそれなんです。この黙示録7章から私はグッと来たから、それであの歌ができた。「素晴らしき天然」の曲で歌える。



9 その日此^{かく}如いわん。これはわれらの神なり。われら俟^{まち}ち望めり。彼われ
らを救いたまわん。是エホバなり。われらまちのぞめり。我儕^{われら}そのすくいを
歎^{なげ}びたのしむべしと。

私たちに言わせると、

「エホバは是実存の主なり」

ということ。「ヤーヴェー」というのは「実存者」、「アドナイ」は「主」。だから、

「実存の主」

それが「エホバ」となると言つたでしょ。私は「ヤーヴェー」という言い方よりも、古い「エホバ」の方が好きだ。「実存」という言葉と「主」という言葉の両方が「エホバ」という言い方に入っているから。この辺はずつとまさにイザヤの讃美歌ですよ。

●キリスト無者

それから今度は26章にいきます。

1 その日ユダの国にてこの歌をうたわん。

ここに、「歌をうたわん」とちゃんと書いてあるわ。

われらに堅固なる邑^{まち}あり。神すくいをもてその垣^{かこい}その藩となしたもうべし。

2 なんじら門をひらきて忠信を守るただしき国民^{くにびと}をいれよ。3 なんじは

神さまエホバは、

平康^{やすき}にやすきをもて心志^{こころざし}かたき者をまもりたもう。彼はなんじに依頼^{よりたの}めばなり。

いい言葉だね。本当の平安である。「シャーローム、シャーローム」と書いてある。

4 なんじら常盤^{とこしとわ}にエホバによりたのため。主エホバはとこしえの巖^{いわ}なり。

まさに本当の他力本願です。依り頼むと、力が来るんですよ。依り頼んで、ノホホンとしているのではない。投げ入れると、力がくる、生命がくる、光がくる。それが「依り頼み」です。

私は時々、壁に寄り掛かつて讃美歌をうたう。これは依り頼みの姿です。

「先生は疲れているのか」

なんて、そうじゃない。私は疲れを知らないんだ。けれども、キリストに依り頼むと、壁がキリストになってしまつてね。まあ私みたいな妙な男はいないかもしれない。

そういう、とこしえに、常に――「とこしえに」ということは「常に」と同じこと――くる日もくる日も。祈りは、依り頼みですよ。大体、聖書は読むこと自体が私には祈りなんです。もう、読み入る、祈り入るということが一つなんです…(異言)…。すぐ来てしまふんだ、この祈りの世界は。もう「祈り」と特別に言わなくても。

祈り入る、祈入。読み入る、読入。なんでも、自分自身がその中に入らなければ承知し



ない魂なんです。その中に入る。それが

「無者」

なんです。こっち側にいないんです、私は。聖書の中に入ってしまった。その現実の中に、グーッとその中に。まあなんと言いますかね、本当にその現実の中に入ってしまったている。だから、無者というのは、自分の姿がその時には本当に無い——私という人間は非常に逆説的なんです——そうするとそこには本当の姿が表れてくる。ありがたいです。けれども、本当に自分が無くなることくらい、自分でもうれしいことはない。また、楽なことがない、力がくることはない。

「何もできない」

とキリストが仰った。

「何も教えてない。ちっとも善くはないんだ」

と。全くキリストは無に徹している。

「私を見たものは神さまを見たのだよ」

と。だから、私は時々、手紙に

「キリストの無者」

と書くんです。私はキリストの無者です。「キリスト者」ではなくて、

「キリスト無者」

という。「キリスト」と「者」の間に「無」が入るんだ、私のは。「キリスト無者」だ。

皆さんも、聖霊にあつてはまさにそういうわけです。自分なんか問題でなくなってしまう、はつきりと。自分を問題にして、いわゆるかえりみてもダメだ。

「内村鑑三」なんていう名前はよくない。「鑑三」という、日に三回鑑みたりして(笑)。

あれは内村先生のお父さんが漢学者だからお付けになったので、内村先生は決していわゆる鑑三ではない。あんな名前は嫌いだったでしょうね。内村先生は、「仰ぎ見る」ということをよく仰ったがね。

「自分を見るのではない。キリストを仰ぎ見るんだ」

と。内村先生の『一日一生』の中の——多分、「5月31日」のところだろう——あの文句は、内村先生の書いた文句の中で最深のものの一つだと思う。ある意味においては最深と言ってもいいくらいなところですよ。あそこに、「自分を無きもの」というような言葉が多分あった。私は、ああ先生はこんなことを言っていたかと思った。

(参考) 内村鑑三著『一日一生』の5月31日の項

「キリストに同化された者、キリストの活ける体の一部分となった者、その困苦と歓喜くるしみよろこびと、その恥辱と栄光はづかしめさかえと、その死と復活とを、彼の内にあって彼と共に父なる神から分与された者、これがキリスト者である。「信じる」とはこの場合においては知識的に承認することではない。また感情的に信頼することでもない。キリストを信じるとは彼



の神格の内に私の人格を投入することである。そうして私を、なき者として、彼を私に代わって私の内に居させることである。これがすなわち信の極みであって、キリストは私たちにこのような信仰を要求するのである。キリストが神であり、霊の宇宙であり、私たちがその霊界の一部分となることができ、初めて私たちの聖化も満足に行なわれ、またキリストの光は私たちを通して世に顕^{あら}われるのである。』(『一日一生』[新版]教文館)

●出我

8 エホバよ審判^{さば}をおこないたもう道にてわれら汝をまちのぞめり。われらの心はなんじの名となんじの記念の名とをしとうなり。

特に「なんじを覚える」というようなときに、歴史的に預言者が覚えるのは「出エジプト」のことです。アブラハムは「出ウル」。ウルを出しました。モーセはエジプトを出しました。我々は「出我」、我を出なくてはいかん。己から抜け出る。脱身心である。出我すると、出我してキリストの中に入ってしまったって、見えないんです。なぜ、見えないか。キリストの中にいるから見えない。

まあ、若い人は、ひとつ飛びにそこへ入らなくてもいいよ。あまり早すぎる——まあ入ったっていいけれども——とにかく一応、私がここらでしゃべっていることは心にとめておいてください。そして、「なるほど」と、いつか思うようになっていただきたい。しかし、年齢にかぎらない。もう今ただちに、「なるほど」でいい。その世界に入る。

「先生がいいと言ったから、まあしばらくゆっくりやろう」

なんて(笑)。私の言うことはみんな逆説的ですからね。いいですか。ただ言葉通りにとらないでくださいよ。どういう弾力性をもつてものを言っているかということですよ。

9 節。これは私の好きな言葉だ。

9 わがこころ夜なんじを慕いたり。

私は深夜祈祷をいたします。また、夢の中で祈ります。そうすると、夢の中で現れてくる。寝がけに祈ると、よくそれが夢の中で実現してくる。こないだのドイツ旅行のワルトブルクでもそうなんだよ。夢でルターが現れてきて、

「御霊のよき戦いを戦え」

と。その時に夢の中でルターだか自分だか分からない。

わがうちなる霊あしたに汝をもとめん。

わがうちなる聖霊はあしたに汝を呼びもとめて、そして一日を突っ走らせる。

あなた方は本当に選ばれたる民ですよ。聖名のゆえに自覚していただきたい。聖名のゆえに。また聖名に在って。みな神の国のために使命をおびている。使命的な存在です。まあ、今の青年が将来、何になるか。野球の選手になりたいとか、何とかかんと言うが、ひ



とつとも使命的な自覚や抱負を持たない。

「青年よ、キリストに在って大志を抱け」

という。あの「キリストに在って」が抜けてしまっている。あの言葉を言ったときに、クラークさんは、

「イン・クライスト(キリストに在って)」

を言ったということを、私はどこかで読んだか聞いたかした。あの「イン・クライスト」を取ってしまった。ダメだよ、「イン・クライスト」のない、手放しの「大志を抱け」では困るよ。

「キリストに在って抱負を抱け」

と。神の国の民たる証者となれということです。

「神の国は汝らのうちに在り」

という。私たちはそのようにして、終末の神の国に対する大希望は、御国は、既に私たちの中に来ているから。

「御国を来らせたまえ」

とは、まさに御国は来ているから祈れるので、でなかったら、空念仏になる。「主の祈り」が空念仏になる。我々のグループでは、主の祈りをひとつもやらない。やらないけれども、その祈りは、祈りの中で自在に出てくるようになる。ルターも言ったよ、

「主の祈りが十字架につけられてしまった」

と。ということは、あまり空念仏になったからダメだと、ルターさんもちゃんとそのことを言っている。

「わがこころ夜なんじを慕い、わがうちなる霊あしたに汝をもとめる」

と。ここに「心」と「霊」とありますね。パウロも、

「心で祈れ、霊で祈れ」

と言った。これが霊的人格というわけだ。心で祈る世界は、それを言葉に表すと、みんなにわかる。霊で祈っている世界は異言になるから、異言的であるから、わからない。わからないけれども、その響きの中から感ずるものがある。

「霊」は

「ルーアツハ」

という言葉ですが、「心」と「霊」の真ん中に

「魂」「ネフェシユ」

がある。「たましい」という言葉は両方を含んだような言葉ですね。「魂」という言葉は、心と霊と両方とも含めたような気持をもっている。私はそんな気持でいます。

神さまは土をこねて人を造った。これに

「魂を吹き入れた」



と書いてある。あの創世記2章7節には、「ネフェシユ」という字が書いてある。そうしたら、「生ける霊となった」

とある。あの「生ける霊」の「霊」も「魂」です。

「ネフェシユ・ハッヤー」

という。それに今度は、神の

「霊」「ルーアッハ」

が入ってきた。神の「ルーアッハ」を入れるために、まず、この「ネフェシユ」にして置いて、神さまはこれに「ルーアッハ」を入れる。それで本ものになる。「本もの」と言つたつて、今まではウソではないけれども。

キリストの

「霊」「プニユーマ」「ルーアッハ」

が入っていないクリスチャンがたくさんあるわけだ。私も永いことそうだった。皆さんはもう、このキリストの霊をいただいている。

だから、それは神の国の民だから、使命的存在である。職業は何だっていいよ、何をしていたつて。けれども、神の国の証人たる使命を担っている。

この信する「信者」というのは、この「まこと」をいただいて、実体をいただいて、そういった実体と化せられてきているんですから、ただ「仰いで信じている」(信仰)ではないんです。

「まこととせられたる者。まことを賜りたる者。真理を賜りたる者。活ける真理を

賜りたる者」

です。

●なんじの熱心

9 わがこころ夜なんじを慕い、わがうちなる霊あしたに汝をもとめん。

と。この「こころ」は「ネフェシユ」「魂」です。「わが魂は夜なんじを慕い」という。「わがうちなる霊」の「霊」は「ルーアッハ」です。

「わが魂は夜なんじを慕い。わがうちなる霊、ルーアッハはあしたに汝をもとめん」ということ。

そは汝のさばき地におこなわるとき世にすめるもの正義ただしきをまなぶべし。

この「ただしき」というのは「正義」と書いてはうまくない。「義」がいい。「義を学ぶべし」と。これはまさに「ツエデック」です。だから、「さばき」と「義」とがまた対句になっている。預言書には、こういう言い方はしょっちゅう出てくる。

「さばき」「ミシユパート」

です。「公平と正義」というときの「公平」がこの「さばき」という字ですから。そして、「義」「ツエデック」



です。神さまはまさに義によって審くのです。そして遂に今度は、その義を与える。だから、

「わがために審きたまえ」

という言葉はそういうことなんです。善悪をしつかりとやってください。義と不義をしつかりやってくださいと。「貧しき者ために審く」というのはそういうことなんだ。

¹⁰ 悪者はめぐまるれども公義をまなばず、直き地にありてなお不義をおこな
いエホバの稜威を見ることをこのまず。

¹¹ エホバよなんじの手たかく拳がれどもかれら顧みず。然どなんじが民を
すくいたもう熱心を見ればはじをいだかん。火なんじの敵をやきつくすべし。

「なんじの熱心」という。救いは汝の熱心がしてください。もの凄いライデンシャフト(激情、情熱)だから。「熱心」なんていう言い方はまだ多少弱い。まあ仕方がない、日本語は。それをどこまでも貫く、熱い魂の貫き、熱心。

¹² エホバよ汝はわれらのために平和をもうけたまわん。我儕のおこないしこ
とは皆なんじの成したまえるなり。

この12節は大事なところです。まず、「汝はわれらのために平和」と言ったって、これは平安だよ、もとは。「シャーローム」という字ですけれども。私たちのために平安をもうけたもう。まず神さまとの関係が本当に立つて、神のころを心とし、魂を魂とし、霊を霊とする、そういうところが平安の世界。平安がくると力がくる。それから、それが横に流れていくと、今度は平和になる。

平安は縦の関係、平和は横の関係。縦の平安がなかったら、横の平和はやってこない。いつもの平和ばかりなものな、今は。世界中がもういろんなことで苦しむのは、軍備拡張のためです。大変なもんだ、この軍備というやつは。飛行機一台が何億円なんてするんだから。

●キリストの大責任

¹² ……我儕のおこないしことは皆なんじの成したまえるなり。

と。我らの行いしこと、我らのわざはみなあなたがなさったのだと。ヨハネ伝14章。15章もそうだ。キリストはそのようにして、

「私にいなさい、私にとどまりなさい。そうでなければ何もできないよ」

と仰った。今度は、

「私にいれば、何でもできるぞ」

ということになる。「何でもできるぞ」というのは、その人らしいことは何でもできるぞ。いまだかつて思わざりしことが表れてくるぞと。だから、

「我らの行いしことはみな汝のなしたまえるなり」



という、この自覚を、本当にアーメンと言って、私たちがこの日々の生活で持つていく。だから、棟方志功も言っている。

「私は自分の版画には責任を持たない。神さまが、仏さまが書かしているんだ」

と、こういうわけだ。棟方志功なんてのは、相手が禅宗であろうと、浄土真宗であろうと、構わない。とにかく、そういった凄いものが自分に作用してくると、それで動いていた。観念の世界ではないから。だから、疲れないんです。自分で力んでいたら、疲れるよ。「ガンバレ」なんて言っつて、がんばっていると疲れてしまう。馬鹿面している方がいい。

「あいつは馬鹿面しているが、なんだかしらないけれど、いろんなことをやりやがるなあ」

なんて。それは、大愚は大賢の世界だからね。これは楽しい言葉ですよ。

「皆なんじの成したまえるなり」

と。

「私の責任ではありませんよ」

と。けれども、人間的な小さな責任よりかはるかにもの凄いことが出てきている。大責任がそこに表れている。キリストの大責任が。必ず成る。

●無我執の世界

¹³ エホバわれらの神よなんじにあらぬ他の主どももさきにわれらを治めたり。然

どわれらはただ汝によりて汝の名をかたりつげん。

この13節の後半も凄いね。

こういうところをグーッと読み入ると、直ちに力がくる。それが祈りなんです。聖書を讀入すること、即ち祈入である。だから、聖書は――

「いかにして読むか」

なんて、釈義学なんていう、いろんな本がある。冗談じゃないよ――非常に簡単なんです。そういう、神の中に入つて、神の霊で、神の言で書かしめられているものを、同じ次元に入らないで、わかるはずがない。

「わざわい禍害なるかな、キリストわが教学」

なんて言いたくなってしまう。皆さんは、いわゆる神学者以上の世界に入っているんですから。そういう、実に簡単な「一如」の世界に、どうぞ、入ってください。一如の世界に。この「一つ」という言葉があとで出てくるから。無に徹すると――「徹する」という言い方をする、また躓きになるけれども――本当に無になるとこの「一つ」になる。無即一なんです。無即一、一即無限。これはパウロも言っているでしょ。

「御霊は一つ。主は一つ。」

と。あの「一つ」というのは、「ああそうですか」ではないですよ。



「その一つの中に私は入ってしまいます」

ということ。そうすると、

「主と一つ、御霊と一つ」

という、みんな「一つ」の中に、一如の世界に入ってしまう。そういう「の中」に入ってしまうと、それが本当の信仰の神秘なんです。それを

「信仰と神秘とはちがう」

なんて、また神学者がやっているから。まだ、中世の神秘家の方がよっぽと深いわ。

まあ、預言者と使徒たち、この次元にこなければ、どうにもならないということがわかる。それを、

「小池先生はむずかしい」

なんて、何がむずかしいか。一番簡単なんだ。最高最深なものは、万人がこれを得ることができる。これは一番簡単だからだ。ちつともむずかしくない。それをみんな難しくしてしまっている。

それは自分を本当に無に投げ入れた――「投げ入れた」ではないですよ、いや実に十字架が投げ入れさせてくださった――十字架が私たちを空っぽにしてください。罪無き世界に。

「汝の我執を、自我を全部贖った」

というのが十字架だから、無我じゃないですか。我は無いじゃないですか、我執は。無我、執の世界に入れられているじゃないですか。そこには俄然、聖霊がやってくる：(異言)…。本当です、これは。だから、「十字架、十字架」と言いながら、聖霊を受けなかったら、何が十字架だと言いたくなる。

●天界で一緒に進んで行こう

14 かれら死にたればまたいぎず、亡霊となりたればまた復らず。なんじかれらを糺してこれを滅ぼし、その記念の名をさえ悉くうせしめたまえり。

徹底的に書いてある。いちいち読みません。17節、

17 エホバよわれらは孕める婦のうむとき近づきてくるしみ、その痛みによりて叫ぶがごとく汝のまえに然ありき。18 われらは孕みまた苦しみたれど、その産めるところは風にいたり。われら救いを地にほどこさず、世にすむ者うまれいでざりき。

いわゆる自分たちの努力ではダメだったということがわかったと。「風に似たり」というような言い方は伝道の書に出てくる。

19 節は気をつけてください。これは旧約でもってこれだけ明るい復活のことが言われているところは、おそらく他にあるかないかということです。



19 なんじの死者しぬるものはいき、わが民の屍かばねはおきん。

こんな言葉が旧約にあつたかと思う。エゼキエル書37章に「枯骨の復活」の事態があるね。枯れた骨がカタカタと音をたてて繋がって、それに肉がついて皮膚がついて、血が通って活けるものとなる。これはイスラエルの国民的な復活を預言している――また個人的な復活のことも――不思議な預言です。エゼキエルというのは非常に霊的な預言者です。あの中に素晴らしい言葉がいくつもこぼれている。

私は預言書に10年間没頭した。本当に愛読した。聖霊が来てから、まず最初に福音書に10年間。もうたまらないです、福音書がよくて。それから今度は、新しい目でもって、預言書に10年間。そして、詩篇に10年間。それは並行しているときもありますけれども、ざつと言つて、そんなことです。

聖霊以前は、無教会時代は1923年から――ちょうど20歳のときに信仰に入った――1950年まで。ずいぶん長かったな。27年間、聖霊無き世界にいた。無教会はまちがつているわけではない。すじはいいんだけど、霊的な血が通ってない。今年で聖霊を受けてから33年になる。でももちろん、1940年から聖書はとにかく、創世記から黙示録まで一応やつてしまった。

まあ、あの録音を全部、文字にしたら何十巻になるかね。そんなことをしようとは思つてませんけれども。

塵にふすものよ醒さめてうたうたうべし。なんじの露は草木をうるおす露のこと

く地はなきたまをいださん。

美しい言葉だね。「露」というのは「ネクタール」、天来の露、生命の露です。

「草木をうるおす露のごとく地はなきたまをいださん」

と。御霊をいただいた者は、この地上で死んでも、決してめそめそすることはない。次のよりよき世界に甦よみがえって、霊界に進んで行くんだから。

これはブラウニングが、『アソランド』の最後の「エピローグ」(辞世の句)で勇ましく歌っている。

「私が死んだら、どうか、『万歳!』と言つてくれ」

歓呼して送つてくれと。それで、天界と皆さんと一緒になお進んで行きますから。

「内村先生の屍しかばねを乗り越えて行く」

なんて藤井先生は言つたけれども、私の屍体乗り越えて行つては困るよ。私は屍体ではないから。天界で一緒に進んで行きますから。時々現れるかな(笑)。冗談だけれども。そういうように、

「死ねども死なず」

とキリストが仰つたこの生命。ヒルティも言つたよ、

「死ぬことは、ちょうど次のお茶の間に入っていくようなものだ」



と。ゲエテとヒルティは実に病をしらなかつた。

「私が逝つたら、大自然は次の存在形態を与えてくれる」

なんて、ゲエテは言っている。こないだ、あのゲエテの死んだ部屋を見たけれども、横に椅子があつた。あの椅子によりかかつて逝つてしまつたんだからね。ヒルティもそうです。お嬢さんがコーヒーかなんかを取りにいって、戻つて来てみたら、もう眠つていたという。そういうのは本当に霊的自然の死です。

「地はなきたまをいださん」

と。どうぞ、私たちはそういうどこまでも本当に明るい。どんな闇にも、必ずこちらは灯火であり、燈台である。大讃歌です、天界において。

20 わが民よゆけ。なんじの室^{へや}にいり、汝のうしろの戸をとじて忿^{いきどお}悲のすぎ

ゆくまで暫時^{しばし}かくるべし。

じつと祈つていろと。

21 視よエホバはその処をいでて地にすむものの不義をただしたまわん。地はその上なる血をあらわにして、殺されたるものをまた掩^{おほ}わざるべし。

これは義人の血ですよ。殉教の血。そのときは神さまの審判がきて、義人の血のために審いてくださるということです。

●キリストと魂が一つのからだとなる

27章に行きます。

1 その日エホバは硬く大いなるつよき剣^{つるぎ}をもて、疾走^{とく}るへびレビヤタン、曲りうねる蛇レビヤタンを罰しまた海にある鰐^{わに}をころし給うべし。

「疾走るへび」というのはアッシリヤ。「曲りうねる蛇」というのはバビロン。蛇に例えているわけです。「鰐」はもちろんエジプトです。キリスト教国なんて言つてたつて、軍備なんかやっていると、預言者には、「蛇」だの「鰐」に例えられてしまう。

2 その日如此^{かく}うたわん。うるわしき葡萄園あり之をうたえよ。

イスラエルのこと。

3 われエホバこれを護り、おりおり水そそぎ夜も昼もまもりて害^{そこな}うものあらざらしめん。4 我にいきどおりなし。

もう怒つてないよ、お前たちは本当に立ち返つたからと。

願^{ねが}わくは荊棘^{いばら}のわれと戦わんことを。

「荊棘^{いばら}」は、荊や棘のようにしてイスラエルを苦しめるもの。

然^{しか}ばわれすすみ迎えて皆もろともに焚^やき尽くさん。

そういうやつはみんなやつつけてしまうぞと。

5 寧^{むし}ろわが力にたよりて我とやわらぎを結べ。



神さまの力の中に入って、本当の平安の中に入れと。

われと平和をむすぶべし。

たたみかけて言っている。

6 後にいたらばヤコブは根をはり、イスラエルは芽をいだして花さき、その
実せかいの面にみちん。

この6節はいいね。神の国の、本当にそのような草木となって、

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり。汝らはその実なり」

ということになっていくわけです。ヨハネ伝15章がこれに応ずると言ってもいいね。あの
ヨハネ伝17章にみると、もう「一つ、一つ」とさんざん書いてあるでしょ。

「我なんじらと一つとならんためなり」

という。あそこも「一つ」だ。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と。これも一つの世界。みんな一如の世界です。

ルターさんが『クリスチャンの自由』の中で似たようなことを言っている。

「信仰というものは、魂が神の言と等しくなる、それと魂が一つとなるようなぐあいに
するのみならず、また、恵みに満ち満ち、自由にし、非常に祝福されたることにする
のみならず、魂をキリストと一つにする。それはあたかも、花嫁が花婿と結婚によつ
て一つになるように、キリストと魂が一つのからだとなるのと同じようなわけである。

それが信仰というものだ」

と。ルターがこれだけのことを言いながら、今のルターの流れであるプロテスタントは何
をやっているかと言いたくなる。それから、もうひとつのところでは、

「鉄が火の中に入られると、鉄と火が一つになる。そついうように、キリストと我々
の魂が一つのからだになる」

と書いてある。ルターは信の世界でそのような現の世界にいた。だから、彼は力があるん
です。いわゆる、ただ「信仰によって義とされる」なんて、お題目を言っているのではな
いですよ。

……(以下録音切れ)……